

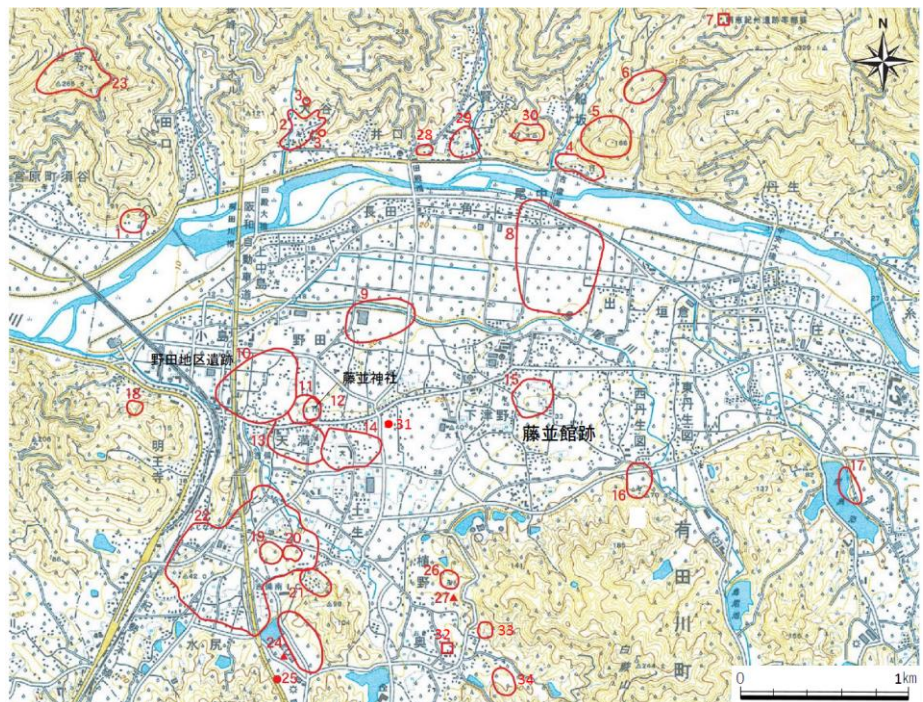
藤並館跡の調査成果

藤並館跡は有田川町下津野にあり、地元では「土居の堀」と呼ばれている。四方に残る土塁と南側を除く三方の堀に囲まれた方形区画が良好に遺存し、近畿地方でも有数の保存状態を誇る平地城館として知られている。藤並館跡が位置する中世藤並荘は、鎌倉時代を通して藤並氏が地頭職を相伝して地域支配を行っていたことから、藤並館跡は湯浅党の構成員である藤並氏との関連が想定されていた。しかし、これまで本格的な調査は行われておらず、その実態は明らかではなかった。有田川町教育委員会では、藤並館跡の実態を明らかにするために、平成28年度に航空レーザー測量を実施し、平成29年度には発掘調査を行った。

歴史

藤並館跡が位置する吉備平野には、原始以来の数多くの遺跡が存在し、早くから開発が進んだ地域であった。仁寿4年(854)の売券である「^{ありだぐんしげ}在田郡司解」(東寺文書)には、在田郡司であった紀氏が所持していた田畑や屋敷地が「丹生」「野田」「小島」などの現存地名とともに登場し、藤並荘の範囲に含まれる小島から野田の沖積平野には平安時代前期まで遡る肥沃な耕地が展開していた可能性がある。野田地区遺跡の発掘調査でも平安時代の^{みそぎ}禊^{ひとがた}儀礼を示す人形・^{いぐし}斎串・^{うまがた}馬形などの木製品とともに、全国的にも出土例が少ない11世紀代の^{からすき}犁が出土しており、周辺部には在田郡司をはじめとして中央との関わりをもつ集団の拠点となる施設が存在していたと推定される。平安時代末期から動向が確認できる藤並氏は、これら古代以来の条件の良い耕地や支配拠点を基盤に本領形成を果たしたと推定される。藤並氏の始祖と考えられる^{ふじなみじゅうろうしたし}藤並十郎親は、湯浅宗重の末娘を妻に迎えて湯浅党に加わり、以後藤並氏は鎌倉時代を通して地頭職を相伝し地域支配にあたった。また湯浅氏とともに神護寺や^{はちまんぐう}六条八幡宮などの寺社造営にも関わり、康永4年(1345)には湯浅本宗家とともに室町幕府の遵行を担うなど、他門の中でも有力な在地領主であった。

藤並館跡に関わる一次史料は存在しないが、『花宮三代記』には康暦元年(1379)紀伊国守護の山名義理によって紀州南朝勢力の中核として踏み止まっていた湯浅党への猛攻撃が開始され、藤並・湯浅・石垣といった湯浅党の拠点が撃破されたとの記事があり、この時期に地域支配拠点をめぐる攻防があったことが想定される。明治4年(1871)に著された『野田記行』に書き写された^{こうじ}弘治2年(1556)7月付の藤並神社石燈籠寄進状には、「土井の^{かたじろうはちたいらのより}城主片田次郎八平頼純」とある(『吉備町誌』上巻)。『紀伊続風土記』にも「堅田次郎八の屋敷跡、北筋にあり方一町の地なり」とあることから、16世紀段階の城主は堅田(片田)氏であった可能性が高い。廃城時期は、今回の発掘調査成果から判断して16世紀後半頃と想定される。



藤並館跡周辺の遺跡分布図

構造

藤並館跡は、有田川左岸の河岸段丘上に立地する。現況は大半が畑地であるが、四方に残る土塁と南側を除く三方に残る堀に囲まれた方形区画は良好に遺存し、その範囲は東西 75m、南北 87mの範囲に及ぶ。館の形状は方形を呈するが、北西部分の堀と土塁は西側の堀・土塁に対して直行しておらず、やや斜行しているために五角形のような形状となっている。土塁の規模は幅 8～16m と一定ではないが、かつては現状よりも幅が広がったと言われている。土塁の高さは現状の堀底から約 2.5m、城館内部との比高差は約 1.5mあり、北西部分が最も高く遺存状態が良い。土塁は全周せず、南東部分は途切れて開口しており、虎口と推定される。南堀は埋没して地表面上にその痕跡はないが、発掘調査によって存在が確認され、堀が四方に巡っていたことが判明した。

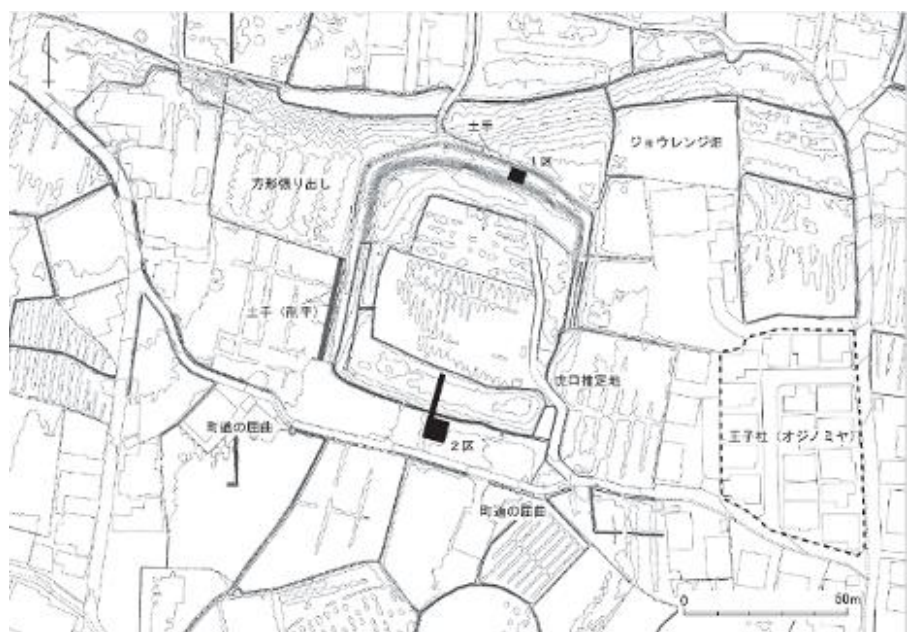
方形区画の外側について、明治期の字切図には城館東側に王子社(オジノミヤ)が描かれ、かつては南面する社地で社叢が広がっていた。北東部にはジョウレンジ畑という通称地名が残るが、その位置は城館に対して鬼門の方角にあたり、城館に関わる宗教施設が存在した可能性がある。方形区画に接する南側の水路と水路に沿って後世に敷設された町道は、方形区画に対応するように対称をなして折れ曲がっていることが注視される。その屈曲の形状は土塁の隅部とも符合していることから、城館の縄張りに伴うものと考えられ、方形区画の外側にも関連施設が存在していた可能性がある。



北堀



藤並館跡航空写真



藤並館跡測量図・調査区配置図

発掘調査の概要

発掘調査は北堀に1か所(1区)、南堀推定地と土塁に1か所(2区)の調査区を設定した。

【1区北堀】北堀は地山を掘削して構築しており、形状は底面が平らな箱堀をなす。堀幅は上面で3.4m以上、現状の堀底からの深さは1.3mあり、堀底から土塁の天端までは4.1mに及ぶ。埋土の下層からは、室町時代後期後半の備前焼が出土しており、堀の掘削は室町時代と考えられる。埋土の堆積状況から判断して堀は滞水する環境の中で埋没したものと考えられる。江戸時代末期から明治初期には、河原石を投棄して用水路としての改修が行われ、河原石の中からは近世の陶磁器や瓦とともに中世の備前焼や瓦類、木箱などが出土した。

【2区南堀】南堀は、調査前の検討では幅10m以上の規模が想定されていたが、発掘調査の結果幅6mの規模を確認し、想定より狭い結果となった。北堀と同じく底面が平らな箱堀をなし、検出面からの深さは1.6mある。底面には、40～50cm幅で地山を削り出して堀と直行するように構築された畝状の高まりが存在しており、これは堀底の水をせき止めて帯水させて灌漑用水に用いる^{せき}堰状遺構であったと考えられる。堀底から約40cm上位では被熱していないほぼ完形の軒丸瓦や平瓦が出土しており、その下層からは瓦の出土が確認できないことから、堀が掘削された後一定の埋没期間を経て施設の^{かわら}瓦葺きを伴う城館の改修が行われたと判断される。

また、堀内の壁際では上面が平らに据えられた3基の礎石状遺構を検出した(礎石1～3)。礎石はいずれも砂岩が用いられており、規模は北端の礎石1が30cm×30cm、礎石2が62cm×56cm、東端の礎石3が32cm×48cmで、礎石1と礎石3上面の高さは約70cmの比高差がある。これらの礎石は、堀が掘削された当初に据えられたものと判断できる。一般的に堀内部の礎石を伴う施設としては、橋脚遺構の可能性が考えられるが、橋脚遺構としては幅が広い。調査範囲の制約から礎石の広がり不明な現状にあっては、施設の性格は不明である。南堀からは、瓦器・備前焼・中国製



1区北堀(東から)

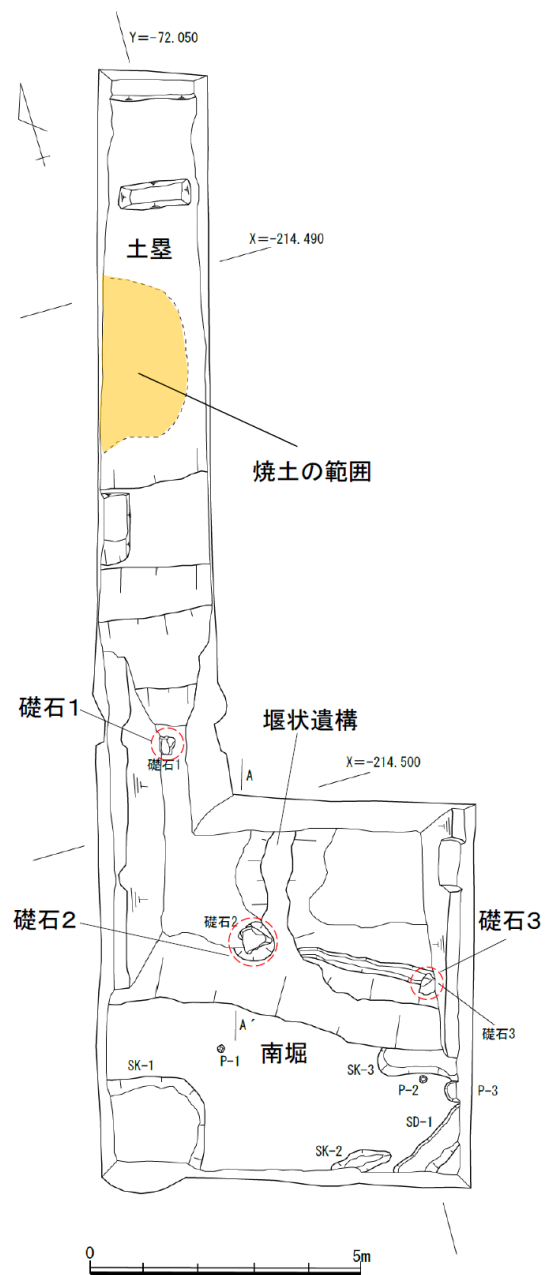


図12 藤並館跡2区平面図



2区南堀（東から）



南堀畝状の高まりと礎石 2（東から）



南堀軒丸瓦出土状況（西から）



2区南堀出土遺物

青磁・瓦、杓子や曲げ物底板、杭などの木製品、竹製品などの他にマツの球果や植物種子・枝などが出土している。

【2区土塁】土塁は調査の結果、大きく 3 時期存在することが確認された(古い段階から第1期土塁～第3期土塁と呼称する)。特に土塁の南端部では、保存状態の良好な鎌倉時代の土塁(第1期土塁)の存在が明らかになった点が特筆できる。

第1期土塁の規模は基底部幅 3.4m、高さ 1.45m で、細かな砂利を盛って土止めとした後、盛土を行って基底としている。基底部の盛土は土塁内側の館内部にも及んでいることから、土塁の構築は館の整地と併行して行われたものと考えられる。上部は、厚さ 10～20 cm 程度の単位で小砂利を含む盛土と含まない盛土を交互に積み上げている。土塁の各構築土には、土師器・瓦器・白磁の小片が含まれており、その年代観から第1期土塁の構築時期は 13 世紀後半と判断される。

第2期土塁は、第1期土塁上に盛土を行いながら北側に拡幅しており、基底部幅 6.1m、高さ 1.6m の規模がある。土塁の構築法は、黒色土を主体に厚さ 10 cm 程度の比較的薄い黄色土を交互に積み上げている。黒色土からは土器や瓦、鉄鏃、碁石などが出土しており、第2期土塁の構築時期は 15 世紀代と判断される。

第3期土塁は、第2期土塁の上部に河原石を用いて 90 cm 程度のかさ上げを行い、上部は比較的細かな砂礫土を積み上げて北側へ大きく拡幅させている。その規模は現状の畑の石積間とほぼ同じ幅 13m 程度と想定される。第3期土塁のほぼ中央部では、12 cm の厚みで面的に堆積する焼土と多量の瓦・土壁を含む焼土層が検出され、土塁上面に瓦や土壁を廃棄した後、火が放たれた状態であると判断される。比較的狭い範囲から多量の瓦や土壁が出土しており、付近に瓦葺き土壁造りの施設が存在したことが想定される。瓦葺き施設の構築は、第2期土塁構築後から第3期土塁構築の間であると判断され、瓦の特徴からその時期は 16 世紀中頃から後半頃と考えられる。また、第3期土塁の下層からは、鎌倉時代の溝や時期不明の遺構が検出され、館内部にも遺構が存在することが判明した。



第1期土塁（東から）



第1期土塁断ち割り状況（東から）



瓦器

第1期土塁出土遺物



中国製白磁



第2期・第3期土塁の断ち割り状況（南東から）



第2期土塁出土鉄鏃



第3期土塁（南西から）



第3期土塁焼土・被熱瓦の出土状況（東から）



第3期土塁 被熱した瓦と土壁



下層遺構（東から）

藤並館の発掘調査では、保存状態の良好な鎌倉時代の土塁が確認されたが、全国的に見ても中世前期に遡る数少ない土塁の検出例として注目される。土塁の構築時期は13世紀後半と判断され、城館の形成が13世紀代に遡ることが明らかになった。藤並館跡が湯浅党関連の重要拠点であることが確認され、当地域における同時代の在地領主は藤並氏のみであることから、藤並氏関連の遺跡であると判断できる。15世紀には土塁の拡張と箱堀への改修が行われ、堀底には礎石とともに堰状遺構が検出されたことから堀内の水を滞水させて灌漑用水に用いていたと考えられる。16世紀中頃から後半には建物に瓦葺きが導入されるとともに、土塁の大規模な拡張が行われる。この時の土塁上面では焼土と多量の瓦・土壁を含む焼土層が検出され、付近に瓦葺施設が構築されたことが分かる。これらのことから、藤並館跡は鎌倉時代の方形居館を戦国期まで改修を繰り返しながら利用していることが判明した。